

2 フィリピン

熱帯性気候とアメリカ文化

福島光丘

早くからの欧米化

独立前に約三世紀間スペインの、次いで約五十年にわたりアメリカの植民地であったフィリピンは、アジアでは、少なくとも外見上は、早くから最も欧米化が進んだ国であった。とくに首都マニラには、一九七〇年代半ばごろまでは近隣諸国には見られない欧米的街並み、近代的なビルが建ち並び、東南アジアでは最も近代的な装いを誇っていた。

こうした状況は衣服を含む生活様式にも当てはまる。イメルダ・マルコス元大統領夫人が公式の席で着用していたテルノ（バタフライ・スリープ等の正装）や男性の公式着であるバロンタガログ、それに地方の少数民族（とくに年配の女性たちは自家製の織物で作ったカラフルな衣服をつけている）を除けば、伝統的な民族衣装はほとんど使われない。日常着はいわゆる洋服で、基本的には日本人と変わらない。



Tシャツ、ジーンズがごく普通の服装（マニラ市内）

とはいえ、熱帯性気候とアメリカ文化の影響を強く受けているためか、デザインや配色の好みは日本人とは違うようだ。配色は一般的に原色が多用され、派手。白ならば真っ白とはっきりした原色に近い色彩が好まれ、漂白していない生織り

色や中間色はほとんど見かけない。ただし、ここ数年の間に輸入の自由化が進み、タイなどの近隣途上国の製品をはじめ欧米のデザインナーズブランドが進出し、日常着とはいえない高級衣服ではデザインも配色も多様化している。

服装の違いで わかる所得階層

日常着に限ればそれほど多様ではないが、所得階層によって違いが見られる。

いわゆる労働者階級に属する庶民は日常は、男はTシャツ、半袖の開襟シャツあるいはポロシャツとスラックスの組み合わせがほとんどである。自宅にいるときや休日には半ズボンになる。

管理職クラスで社用あるいは自家用車で通勤している中産階級以上の人たちは、勤めにはバロンタガ

ログあるいは背広に長袖Yシャツ、ネクタイが普通である。日本のサラリーマンと似ているが、マニラに限っていえば、彼らの方が色柄も、着こなしのセンスもずっとスマートである。

バロンタガログは、刺繍を施された半ば透けて見える生地で作られる。安いものはポリエステル、または麻等の天然繊維との混紡もある。本物はパイナップル繊維とされているが、現在ではほとんどは絹製であるが高価で、クリーニング代もかかり庶民にはとても買えない。背広と同様に中流階級以上のステータスシンボルである。

しかし、マニラから少し離れば知事、市・町長あるいは会社の社長といった地方名士も日常の勤務時間中であっても半袖の開襟シャツやポロシャツ姿である。知事室でも冷房がなかったり、あってもメインテナンスが悪いから効きが悪いのが普通である。それにこうした服装の方が部下や住民とのコミュニケーションがうまくいくという効用があるのかも知れない。

女性は氣候が湿潤なためワンピース姿が目立つ。自宅やその近くではいわゆる「あっぱっぱ」を着ている。ただ、通勤ではツーピースが増えるようだが、有名なデパートや銀行などの一流企業に勤める店員や窓口の女性たちは行き帰りにも企業支給の制服を着ることが多い。被服費の節約なのか勤め先を誇りにしているのかは定かではない。もう少し地位の高い事務職や秘書の女性たちは自前のブラウスとスカートが普通である。

屋外は暑いが、ビルの中は冷房が良く効いていてカーディガンやジャンパーを着込む人もいるほどである。一・二月の冬あるいは乾期には気温が下がるので、といってもルソンの平地で最高

摂氏三十一・三二度（最も高い五月は摂氏三五度）、最低で摂氏一八度台（同摂氏二三度）にすぎないが、彼らは寒いという。そのせいかこの季節には街中でもジャンパーやカーディガンを羽織っている人を多く見かける。

衣服のうちTシャツ、スラックス、ジーンズ、子供服などはスーパーマーケットやデパートで比較的安く既製品が手にはいるが、少し良い物だと日本で買うより高い品物もでてくる。

既製服より仕立屋で

普通の家庭にはミシンはない。縫製の技術を持っている。ミシンを買う余裕があれば、自宅ですぐにも仕立屋を始められるから、この種の零細な仕立屋は数が多い。人手が余っているから人件費は安く、既製服よりカスタムメイドの方が安くできる。そこで、多くの人たちは生地を持って行って仕立屋に注文する。

生地は国産物は安い。質や色柄があまり良くないから、少し余裕のある人はマニラのデイベソリ



州政府職員制服（左右の女性）

ア・マーケット（公設市場）にある生地屋で輸入反物や付属品を買う。フィリピンでは一九七〇年代から綿花が少量生産されるようになったにすぎず、綿工業は発達しなかった。したがって、化学繊維原料はもちろん、麻繊維（苧麻・ラミー）を除けば、綿繊維も事実上ほとんど輸入に頼っているから、製品価格は比較的高い。今では民族衣装に使われる刺繍糸も、良い物は大部分が日本製である。

顧客層によつて仕立屋にもランクがある。ショッピング・センターに店を構えた洋服屋もあるが、これは上流階級向け。零細な仕立屋は、中産階級の上層、下層向け、それに庶民、例えばメーダたちが使う仕立屋に分かれる。もちろん女性向け、男性向け両方ある。日本の女性たちは、生地は日本で買ってくる人が多いが、上客である。ブラウス、Yシャツ、スカート、ワンピースなど、ほとんど何でも注文に応じる。デザインは婦人服の場合は日本やアメリカのデザインブックの写真をもとに作ることが多いようだ。大体が正規の訓練を受けていないので、仕立ての腕にはかなりばらつきがある。

洗濯好きな人々

極端な貧富格差など問題の多いフィリピン経済ではあるが、二十年くらい前に較べれば、人々の服装はかなり良くなっている。

それに、フィリピン人は概してきれいい好きである。もちろん今でも衿や袖が擦り切れたシャツを着ている人々を見かけるが、服は綺麗に洗濯、アイロン掛けされ、こざっぱりとしている。

現在の日本のように普段着をクリーニングに出すようなことはしない。昨年あたりから日系メ

「カーの洗濯機の広告が出始め、徐々に普及しているようだ。しかし、棒石鹸を使って手でごしごし、あるいは石に叩き付けるか洗濯棒で叩くかして、力まかせに洗濯するのが伝統的なやり方である。ただ、ここ十年ほどの間に日本の青年海外協力隊の隊員たちが、日本では今ではほとんど見掛けることのない「洗濯板」を紹介し、かなり普及しているという。いずれにしても力まかせに入念に洗濯するから生地傷みは激しいようだ。綿などの天然繊維よりも、褪色に強く、丈夫で長持ちする化学繊維が好まれるのはそのせいかもしれない。

面白いのは、洗濯物をロープに干す場合もあるが、生け垣や空き地があれば草の上に広げて干すことである。それに時々水を掛ける。なぜかと聞くと漂白のためだという。ただし、本当に白くなるものか確かめたことはない。

(ふくしま みつお／アジア経済研究所動向分析部主任調査研究員)